様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２７２０２７３

研究課題名（和文）モンゴル帝国治下中国における宗教の様態とモンゴル政権の文化政策

研究課題名（英文）Studies on the religious trends and the cultural policy of Mongol government in China of the Mongol period

研究代表者
櫻井　智美（Sakurai, Satomi）

明治大学・文学部・准教授

研究者番号：４０３８６４１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,700,000円、（間接経費）　510,000円

研究成果の概要（和文）：モンゴル帝国治下中国における文化政策の様相について、主に中国の他時代の岳涜祭祀に対する政権の態度と比較検討することによって、岳涜祭祀の盛況さの原因を探った。その結果、四方の山川神を祭る岳涜祭祀を行う背景には、「領域概念」・「天下概念」とも呼ぶべき領域支配への意識があり、モンゴル帝国の支配によって中国が一つの王朝下に支配された時代となった点が、岳涜祭祀の盛況さの一因となったと結論づけた。また、道教教団と政権の関係を中心に時代的な特色が強調されてきた、この時代の文化政策の理念やあり方は、中国王朝の統治手法を踏襲する側面も大きかった点も明らかになった。

研究成果の概要（英文）：　I studied on the cultural policy of Mongol government in China of the Mongol period, and mainly analyzed political importance of the rituals to worship the gods of the Five Mountains and the Four Rivers by comparing with the religious ceremonies and rituals of the other Chinese dynasties. I could point out that there should be the territory image, or the image of whole country Tianxia behind of holding ceremonies to worship the gods of the Mountains and Rivers, which were recognized as the geniuses of four directions, by the Mongol government. I figured that the ceremonies and rituals to worship them were respected and held repeatedly, because only Mongol government controlled whole of China proper in the Mongol period.
Many past papers emphasized the effect of the Mongol rule and characteristic of the period. But I pointed out that the idea and feature of the cultural policy in China of the Mongol period systematically followed policies of precedent dynasties in China.

研究分野：東洋史

科研費の分科・細目：中国古代・中近世史

キーワード：東洋史　中国　モンゴル　岳涜祭祀　国家祭祀　文化政策

１．研究開始当初の背景

モンゴル帝国治下の中国（チャイナプロパー）の研究は、1980 年代以来、資料的に、また方法論的に大きく変化した。その後の 30 年間に、日本国内では、新出資料による新知見を用いて、史的唯物論的分析方法に基づいた元代基層社会構造の研究成果を、改めて読み直し塗り替えていく作業が、地道に続けられてきた。これらの過程で特に重要視されたのが、石刻資料と文書資料の利用であった。とりわけ石刻資料については、日本を皮切りに、中国・台湾・モンゴル本土など各地において、関連する石刻資料の整理と研究が飛躍的に進み、新たな研究手法として確立してきた。

石刻資料を用いたモンゴル帝国治下中国の宗教や文化政策の研究として、1、華北における道教教団と政権の関係性に関する研究、2、曲阜をはじめ漢地における儒学の振興策についての研究が特に大きく進展した。1 では、華北の全真教集団がモンゴル帝国初期に社会的勢力を広げる一方で、政治の場面にも意見を反映させていたこと、一方の政権側も文書行政の執行役・在地社会との連繋のために道教集団を利用したことなどが明らかになった。2 では、モンゴル時代を通じて少しずつ進められた儒教・儒学教育の保護の歴史的変移が明らかになり、併せて「漢文化を理解しなかった、もしくは傷つけたモンゴル」政権のイメージが根底から覆された。しかしながら、それらの研究は、道教や儒教を個別の研究対象として展開されており、それらを比較検討した研究は、乏しいこと状況にあった。

そのような状況の中で、自身も石刻資料を検討材料の１つとして研究に利用し、それらを中心に分析することによって、モンゴル政権による「中国的」祭祀活動についてその一端を明らかにしてきていた。しかしながら、道教・仏教などの諸信仰と、宗廟・社稷や岳渎祭祀等国家祭祀の関係は、ともに思想や理念にからむ問題として大きく文化政策に関わるものでありながら、中国支配の主要な要素として総合的に研究したものは未だあらわれていないようであった。しかしながら、道教・仏教などの諸信仰と、宗廟・社稷や岳渎祭祀等国家祭祀の関係を総合的に研究したものは未だあらわれていないようであった。

そこで、自身がそれまで続けてきたモンゴル政権による中国的な祭祀活動の研究を軸に、モンゴル政権の文化政策全般についての総合的な研究を進めたいと考えた。

【参考文献】

・櫻井智美「日本における最近の元代史研究―文化政策をめぐる研究を中心に―」、『中国史学』12、2002.10
・森田憲司「「石刻熱」から 20 年」、『アジア遊学』No.91、2006.9

２．研究の目的

まず、野沢佳美編『元代史研究文献目録 1971-1988』（立正大学東洋史研究室、1991）以降論著リストの存在しないこの 20 年の元史研究のうち、文化政策に関わる研究成果を一旦まとめてベータベース化し、分析する。

モンゴル帝国による中国支配期において、モンゴル政権は、中国在来の文化や宗教を尊重し、モンゴル古来の文化や伝統に固執することなく柔軟な統治政策を採用した。モンゴル政権による国家的な祭祀活動について、その理念やあり方に対する検討を進め、さらに、個々に検討されてきた、チベット仏教・在地の道教集団・孔子を奉じる儒教集団などとモンゴル政権との関係についても比較検討し、モンゴル政府の文化政策に対する態度や考え方を総合的に考察する。また、それを通じて、中国文化史とりわけ中国宗教文化史におけるモンゴル帝国が果たした役割を明らかにする。

３．研究の方法

まず、モンゴル帝国治下中国に対象を絞り、近 30 年の祭祀・宗教・文化政策の研究について集約してデータベース化し、その全体的な研究の方向性について分析する。様式としては、野沢佳美編『元代史研究文献目録 1971-1988』の凡例を採用し、さらに内容に関するメモを附して、目録の作られなかった近 25 年の研究動向を正確に把握する。この間、中国大陸では、CNKI（中国知識資源総庫）の整備が進められ、欧米と同様に費用をかけさえすれば資料の収集が容易な状況になってきているため、現地での資料調査をほとんど行うことなく研究状況を把握できる。欧米の研究については、その方法論に注目して関連資料を収集し、データベースを充実させる。

同時に、自身が進めてきた岳渎祭祀を中心とするモンゴル政権の国家祭祀について、それが持つ儒教的な理念を十分に念頭に入れながら、さらに検討を進める。近年、モンゴル政権の中国における統治については、その画期性に注目する研究が盛んである。しかし、宗教様態に関する分析では、前代（宋金）からの変化の面に加え、中国の在地宗教に一貫した流れが必ずや存在しているはずである。そこで、国家祭祀に関する自身の研究結果もともに、さらに、思想・宗教方面の研究成果と比較検討を行う。

併せて、モンゴル帝国治下中国の宗教・祭祀施設について、地図を使った学術的な情報ウェブサイトを用意する。

４．研究成果

モンゴル帝国治下中国の祭祀・宗教・文化政策などと関連する研究文献の収集・整理とデータベース化（1989 年以降）は、国内の関連文献をほぼ網羅できたが、外国語文献の収集・整理を完了することが叶わず、現時点では公開できていない。しかし、本研究終了後

も引き続き整理を続け、早期に公刊する予定である。

並行して、モンゴル政府による文化政策について、五岳四渎の１つで河南省済源市にある済渎廟に対する祭祀活動を事例として、検討を続けた。その検討の結果以下のことが明らかになった。

①モンゴル皇室と済渎廟との間には、投下領の問題とも関わる特殊な関係がある。済渎の祭祀は、そのために、政権内部での政争とも関わりをもった。その傾向は、特に至元年間に顕著であった。

②チンキムに対する「皇太子」という称号の使用を中心に、石刻という同時代史料が持つ研究の可能性を提示した。

済渎廟における祭祀の詳細な検討を通じて、モンゴル皇室が岳渎祭祀を重視する姿勢が、よりいっそう明確になったため、同時代の岳渎祭祀の様相について、改めてその概観と位置づけを試みた。その結果、以下のことが明らかとなった。

①岳渎祭祀が道教と密接な関係を持つことも要因の１つとして、モンゴル政権により中国的祭祀の中から選択的に早期に実施された。

②岳渎祭祀は 18 の山や川を対象とするが、その中でも、済渎・北岳・中岳・北鎮・南海廟における祭祀に関する史料が豊富であることを根拠として、それぞれの廟で祭祀が盛んだったのかどうか、そして盛んだった理由を追及した。政権の中枢との距離が大きく関わっていることを確認した。

このような考察を基礎において、中国の他時代の岳渎祭祀に対する政権の態度と比較検討を行い、モンゴル統治下中国における岳渎祭祀がとりわけ盛んだったことを指摘し、同時代における岳渎祭祀の盛況さの原因を探った。その結果、四方の山川神を祭る岳渎祭祀を行う背景には、「領域概念」・「天下概念」とも呼ぶべき領域支配への意識があり、モンゴル帝国の支配によって中国が一つの王朝下に支配された時代となった点が、特に中国の知識人に対して「中国」という天下を統一した（「第一統」）ということを認識されるものとなり、それが岳渎祭祀の盛況さの一因となったと結論づけた。

また、道教教団と政権の関係を中心に時代的な特色が強調されてきた、この時代の文化政策の理念やあり方は、特に祭祀の面については中国王朝の統治手法を踏襲する側面が大きく、祭祀を初めとする文化政策実施の理念を考察する場合、中国歴代王朝の様態との比較が有効であることもわかった。このような分析方法は、新出・新公刊資料を駆使して、今後も活発になっていくと思われる。

本課題研究を通じて、済渎廟との学術的な交流も軌道に乗ってきた。外国史の研究では現地との地道な交流が不可欠であり、今後につながる礎を築けたと考える。同時に、本課題で明らかになった成果をホームページで公開した。その内容は現時点では直接的な成果（関連論著等）の提示に止まっているが、今後、現地調査の結果や写真を用い、利用者視点の情報を採り入れ、現地のサイトや旅行情報のページと有機的なリンクをはかることで、歴史的な学術成果を広く利用してもらえるように更新を行っていく。このような研究環境の整備にも常に注意を払い、有効な研究費の活用を今後も心がけていく。このようなシステム構築は、研究結果の社会への還元という意味を持つだけでなく、これによって、研究者間での状況を共有することで無駄な現地踏査の支出を防ぎ、最終的に効率的な研究費の運用が図られるという意味も持つと考えている。

近年、モンゴルの画期性を強調する研究が盛んであるが、中国の前代の王朝の政策を十分に踏まえた上でモンゴル政権の文化政策が遂行されたことが本研究から明らかになった。同時に、国家祭祀の理念的な側面や、地方・士人層の視点から捉えた文化政策の諸相は、金や南宋の状況と十分な比較検討が行われてこなかった研究状況が浮き彫りになってきた。モンゴルという外来政権がどこまでの範囲で中国の伝統的な概念による政策を遂行したのかは、古い問題のようでありながら、新出史料の増加を受けた研究はまだまだ不十分であると言わざるを得ない。本研究を通じて収集・整理できた近 30 年の研究成果を生かしつつ、今後、さらなる研究が望まれる。その研究の進展によって、外来政権と在地社会との関係の全体像が、今後少しずつ明らかになっていくと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①<u>櫻井智美</u>、「元代的岳渎祭祀：以済渎廟祭祀為中心」、中国元史研究会編『元史論叢』、査読有、第 14 輯、2014、pp.312-319

②<u>櫻井智美</u>、「モンゴル時代の済渎祭祀―唐代以来の岳渎祭祀の位置づけの中で―」、『明大アジア史論集』、査読無、18 号、2014、pp.381-397

③<u>櫻井智美</u>・姚永霞、「元至元 9 年「皇太子燕王嗣香碑」をめぐって」、『駿台史学』、査読有、第 145 号、2012、pp.23-49

〔学会発表〕（計１件）

①<u>櫻井智美</u>、「元代的岳渎祭祀：以済渎廟祭祀為中心」、元代国家与社会国際学術研討会、2012 年 8 月 25 日、中国天津市・ 匯高花園酒店（ガーデンホテル）

〔図書〕（計１件）

①吉澤誠一郎編著、放送大学教育振興会、『歴史からみる中国』、2013、総 252 ページ、担当箇所：pp.84-114

〔その他〕
ホームページ情報：「櫻井智美 Homepage」
http://www.kisc.meiji.ac.jp/~sakurais/

６．研究組織
(1)研究代表者
櫻井　智美（SAKURAI, Satomi）
明治大学・文学部・准教授
研究者番号：４０３８６４１２